

論文

ドゥルーズ & ガタリの資本主義論における隷属の論理と新自由主義の台頭

——『千のプラトー』を中心に——

濱 中 健 太*

はじめに

ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) は、フェリックス・ガタリ (Félix Guattari, 1930-1992) と 1972 年に『アンチ・オイディプス』、1980 年に『千のプラトー』を発表した。二冊はいずれも副題が「資本主義と分裂症」とされ、二人は 1970 年代に資本主義についてまとめた記述を行った。佐藤・廣瀬は『アンチ・オイディプス』は社会的服従化が主たる権力形態をなす時代の書であり、『千のプラトー』は、パラダイムをなす権力形態が社会的服従化から機械状隷属化へと移行しつつあった時代の書である¹。この 1972-1980 年という 1970 年代のほとんどの 8 年間で、彼らの哲学にいかなる移行があったのか。本論では、この期間が現在ではいわゆる「新自由主義」と呼ばれる政治経済的な潮流の只中にあることに注目し、彼らの哲学の変化と新自由主義的な政治経済体制の変化とのあいだに並走関係があるのではないかと考える。

デヴィッド・ハーヴェイは、1970 年代の政治経済の実践と思想が「社会福祉の多くの領域からの国家の撤退、規制緩和、民営化といった現象」の一般化によって新自由主義へ転換し始めたといい、とくに 1978-1980 年が「世界の社会経済史の革命的な転換点」になるとする²。この時期の社会体制は、福祉国家から経済を市場原理に任せることや金融への介入などの政策からなる新自由主義的な国家体制へ移行する時期だと理解される。

こうした世界的な潮流の中でフランスはいかなる状況だったのか。前提として第二次世界大戦以降のフランスでは、国家が企業を国有化し経営に関与し、経済をコントロールするディリジズムと呼ばれる体制が採られてきた³。この体制が新自由主義的な方向へ転換するのは、1974 年 5 月に大統領となったジスカール・デスタン政権においてである。『千のプラトー』のなかにもその名前が確認できるジスカール・デスタンは、「経済的自由主義政策の推進」などを目指し「先進リベラル社会」の実現を目標にした⁴。政権がいわゆる新自由主義的な方向へ明確に舵を切ったのは、変動為替相場制への移行と第一次オイルショックの影響を受け、経済危機に陥った 1974-1975 年あたりだとされる。この危機に対応したのが、1976 年 8 月に首相に就任した経済学者のレイモン・バルである。

バルが打ち出した経済政策、通称「バル・プラン」では、公共事業の実施、中小企業への支援、市場の独占規制などが計画されていた⁵。バルは、1978 年以降の計画に企業の自由化を盛り込み「いかなるディリジズムも放棄し、市場メカニズムを中核とする経済的自由主義政策を採用するという宣言」⁶を行ったとされる。これはフーコーの分析を適用すれば「社会プロセスの内部に市場のメカニズムのための場所を設けようとする政策」⁷だといえるだろう。

市場原理を導入した政策の採用を試みたバルは 1978 年の『エクспанション』誌にて、自らの自由主義の理念についての説明をするなかで、企業を「国家は国有化しなくても、十分に管理できる」⁸と発言している。この発言は、国家による直接の介入を減らしつつも企業の管理を行おうとする点でまさしく新自由主義的だ。

フランスの政治経済体制の新自由主義的な方向への進路変更もまた、ハーヴェイが指摘した時期に呼応する。た

キーワード：ドゥルーズ & ガタリ、新自由主義、資本主義、機械状隷属、マイノリティ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2018 年度入学 表象領域

だし、英米での新自由主義的な政治経済体制が労働組合を解体する方向に進んだのに対し、フランスでは労働組合との交渉が行われ、経済体制への参加を促進する方向に進んだところが異なる。産業界という集団が強い位置を取ったのがフランスの新自由主義的な方向転換の特徴である。

ドゥルーズ&ガタリの資本主義論は、スラヴォイ・ジジエクが「後期資本主義のイデオログ」⁹になりうるように、新自由主義的な思想潮流に親和性の高いものとみなされる。この点は、リゾーム状のあらゆるものへの接続というイメージから、Thriftが資本主義自体をネットワーク状のものとして論じたり、Defuorが主体をあらゆる接続に開かれた存在として資本主義に順応するものとして論じたりしている¹⁰。このようにドゥルーズ&ガタリの思想は、資本主義の全面化の理論に適用されることが多く、批判の対象ともなった。しかし、現代資本主義論への彼らの理論の適用は、政治論や支配体制への対抗の議論から目を逸らすことで成り立つことが多い。

そこで本論は『千のプラトー』の記述を中心に、政治論と資本主義論をつなぎ、ドゥルーズ&ガタリがいかなる支配体制を直視し、どのように批判したのかを考察する。そして、先行研究で結びつけて論じられることの少なかった新自由主義的な思想への批判という政治的なテーマを、明示的にはされていない『千のプラトー』から読み取ること、新自由主義的な思想との親和性の高さが指摘されてきた見解とは異なる立場を示し¹¹、彼らの理論が資本増殖に依存する新自由主義的な支配体制に隷属せず、個別性を保つための対抗の道具だと提示することを目的とする。

そのために、1) ドゥルーズとガタリそれぞれの1970年代における政治に対する発言を整理し、この時期の彼らの支配体制への態度を確認する。次いで、2) 『千のプラトー』第9プラトーから、群衆とその管理のためのファシズムを論じる。そして、3) 第13プラトーでの資本主義と支配体制の関係を〈機械状隷属〉概念から考察する。最後に、4) 彼らの議論がいかに新自由主義的な支配体制を分析、批判しようとしたのかを論じる。以上から本論は『千のプラトー』の政治経済的な読解の一面を提示することになる。

1. ドゥルーズとガタリそれぞれの1970年代の時代認識

本章では、ドゥルーズとガタリそれぞれが1970年代を振り返った文章から彼らの時代認識を整理する。

1-1. 1970年代を振り返るガタリ（とネグリ）

ガタリは、1985年のアントニオ・ネグリとの共著『自由の新たな空間』で、1970年代の政治経済的な潮流が「統合された世界資本主義」という「多中心的かつ厳密に計画されたコントロール体制に従属させ、世界的次元において、超国家的統合を強化しようという方向」¹²へ向かったと述べている。また、この統合の条件に「社会的なものの情報処理化（コンピューター化）を基盤」とした生産様式と労働力の管理があったとしている。

ガタリは、世界的に資本主義の構造の変化が訪れたのが1970年代であったと認識し、世界的な市場の構築という考えかたが現れ、それに寄与したのは情報技術革新であると理解している。

ガタリが「統合された世界資本主義」というのは、フランスも加盟していた欧州共同体の運動が考えられ、通貨統合への動きなどの国際的な金融市場の構築が目指されていた。このように市場統合を目指したのもこの時代の特徴である。

1-2. ドゥルーズによる『アンチ・オイディプス』以降の時代認識

ドゥルーズは、『アンチ・オイディプス』から『千のプラトー』のあいだにある8年という期間についてインタビューで語っている。それぞれの著作が置かれた状況を『アンチ・オイディプス』は「68年後の、激動と探求の時代」に影響されたものであったのに対し、『千のプラトー』は「書物をめぐる経済、新たな政治の全体が、今日の順応主義を押しつけている」ような「非常に強い反動が存在する」（DRF 162/249-250）状況にあったと述べている。こうした状況下に置かれた『千のプラトー』では「音楽について、樹木について、あるいは顔について語っているときさえ、政治を实践している印象を持っている」（DRF 166/255）と語っている。このように『千のプラトー』は、新たな政治体制への順応という状況において記されたものであり、彼らなりの政治の実践を思考したものだとしてドゥルーズ

ズは認識していたのである。

1-3. ドゥルーズの政治への言及

ジジェクは、ドゥルーズが「政治には無関心である」といい、ガタリとの共著は「『ガタリ化された』ドゥルーズ」のものであり、ドゥルーズ個人のテキストに政治的なものはないという¹³。しかし、1970年代のドゥルーズ個人に政治的なテキストがなかったとはいえない。例えば、1972年のフーコーとの対話「知識人と権力」に、当時の状況を踏まえたドゥルーズによる政治への発言がテキストに残っている¹⁴。

たしかに当時もドゥルーズ個人の政治的な立場は不明確であったようで、フーコーは、ドゥルーズの政治活動について疑問が寄せられているという。これに答える形でドゥルーズは自らの政治への態度を語る。

ドゥルーズは、理論と実践の関係が「新しいやり方」になりつつあるとし、この関係が「非常に部分的で、断片的」(ID 288/129-131)であるという。このとき理論は「つねに局所的」であると語る。ドゥルーズは、理論と実践の関係が「活動する個人のなかでさえ、つねに多様体」であり、「小集団」のためのものになり、代表をもたない「中継や網の目の諸関係のなかでの行動、理論的行為、実践活動しかない」(ID 289/131)としている。ドゥルーズにとって政治への理論による介入は、実践を変容させるものであるが、「つねに局所的」な小集団＝多様体のためのものであり、政治全体を改革するものとはならない。ドゥルーズは、理論が「道具箱」であり「権力に対抗する」(ID 290/132-133)ために複数化していくもの(＝多様体)だという。

ドゥルーズは、対話の後半で現状について、権力が「全体的で包括的なヴィジョン」(ID 294/137)を発揮し、フランスの資本主義にも押し寄せつつあり、政治経済体制が変化していると述べている。

2. 『千のプラトー』における政治論

前章で整理した彼らの政治経済体制の認識が、実際に著作のなかでどう検討されたかに議論を移す。以降で本論はドゥルーズとガタリが、彼らの置かれた状況のなかで、いかに政治や資本主義を論じたのかを考察する。まずは、『千のプラトー』の第9プラトー「1933年——ミクロ政治学と切片性」における政治について検討する。

2-1. 「切片性」と政治体制

ドゥルーズ&ガタリは、第9プラトーの冒頭から、政治体制について「切片性 segmentarité」という概念を鍵に議論しはじめる。ドゥルーズ&ガタリによると「われわれは一本の、あるいは複数の直線上で、線形に切片化される」(MP 254/中 97)。彼らが切片化の例として示すのは「住まいと往来、労働と遊びなど」であり、「住居は各部屋の用途によって、街路は都市の秩序にしたがって、工場は労働や作業の性質にしたがって切片化される」(MP 254/中 97)。つまり、さまざまなものに「区切り」を設けることが考えられている。家と部屋、都市と街路、工場と製造ラインなどのAとBという結びつき(＝線分)を「切片性」として切り出しているのである。ドゥルーズ&ガタリは人間を「二項的」な区切りの線を重層的に含むことで構成される存在だと考える。

重層的な複数の切片性を内包するのが「国家」である。国家は、切片性を内にもつ機構として、社会的身分など、さまざまな切片＝区切りを養生したり、人々に押し付けたりする(Cf. MP 255/中 99)。ゆえに国家における「近代的政治体制は、全体として統一され、統合された一つの総体」(MP 255/中 100)とされる。近代的政治体制は「階層秩序がピラミッド状を呈するとはかぎらない」(MP 255/中 100)とされ、テクノクラートや官僚の支配が行う労働の分業化や役所の部門の細分化という形で区切りを強固にし、分割する形の支配が進んでいると考えられている。ドゥルーズ&ガタリは、近代的政治体制が二項的な切片性を「硬質なもの」(MP 256/中 100)にすることで支配を強固にすると考えるのである。

2-2. 切片性のふたつのタイプ

柔軟なものと硬質なもの

ドゥルーズ&ガタリは切片性をふたつのタイプに区別する。そのひとつが「『未開』で柔軟なもの」であり、もう

ひとつが「近代的」で硬質なもの」(MP 256/ 中 100) である。

未開で柔軟な切片性は、階級や性別という二項対立の対応関係からなる。そしてさまざまな切片性 (= 線の結びつき) が関係しあい、「複数の結節点、目、あるいはブラック・ホール」(MP 256/ 中 101) という複数の中心をもつ体制をつくる。この体制は複数の切片のつながりからなる単一の中心をもたない社会関係を構築する。

対して、近代的で硬質な切片は、「放射状に広がる根の集合が、中央の樹木につながっていく」ような「中央集権型の権力が誕生し、樹木状のシステムが原始的なりゾームの突発的な動きを制御する」(MP 256-257/ 中 102) ものである。この体制で権力は「単一の集積地点に」集中し、「あらゆる目の背後に、いわば一個の交差点をつくってしまう」(MP 257/ 中 102)。権力を象徴する父や教師、雇用主などの目がひとつの政治体制の支配を代理するようにつながっていき、「n 個の目」から「単一の中心としての目」へと権力は変容する (MP 257/ 中 102-103)。ミクロからマクロへ、n 個から単一へという集権型の体制への移行である。この移行が切片性の硬質化であり、父と子、教師と生徒、雇用主と従業員といった切片性のもつ区切りをそのままに、より強固な上下関係を構築するようになる。

切片性の等質化

さらにドゥルーズ&ガタリは、さまざまな切片性が「等質化される」(MP 258/ 中 103-104) という。領土の区画整理や都市の整備などが切片性の等質化にあたる。これは切片性のもつ区切りをより強調することで権力側がヒエラルキーの下位にあるものを制御しやすくするために行われ、切片の硬質化に加担する。

硬質化した切片は、「強調され超コード化されて、芽吹く能力や、成立や解体の途上にある、いわば活動状態の切片化との力動的関係を喪失したと思われる」(MP 258/ 中 104)。切片は変質することなく固定化されることで反乱などの活動能力を喪失させられる。そして、切片性が硬質化することで、単一の中心をもつツリー状の組織が現れる。ツリー状の組織は、「可能性の世界を基番の目のように仕切る構造、もしくは組織網」(MP 259/ 中 105) となる。

ドゥルーズ&ガタリは切片性のふたつのタイプについて、柔軟な切片性を「ミクロ」・「分子状」とし、硬質な切片性を「マクロ」・「モル状」とする。そして現代人は「二つの切片性を切り離すことはできない」のであり、「両者が共存し、相互に侵入し合う」(MP 260/ 中 106) 政治体制を生きることになるという。

2-3. 群衆を制御するファシズム

バールの発言に表れていた国有化を廃した企業の管理へという移り変わりは、分業化や細分化に対応した企業間の等質化による政治体制につながっている。いかにして企業などの集団を管理するかという政治的な支配へと議論を移そう。

ドゥルーズ&ガタリは、「要するに、すべてが政治的であるが、すべての政治は同時にマクロ政治とミクロ政治である」(MP 260/ 中 106) という。とくに彼らは「知覚や感情、そして会話などのミクロ政治学」をより詳細に展開することで政治について語る。

ミクロ政治が対象とするのは、社会階層のなかで「同じ運動を起こすこともなく、同じように分配されることもなく、同じ目的もなければ同じように闘争することもない複数の「群衆 masses」」(MP 260/ 中 107) である。群衆は「分子状」であり「絶えず、階級から漏れ出て、流れていくもの」(MP 260/ 中 107) と定義される。資本家／労働者という階級の二項に人々を収めることはできず、資本家であれ、労働者であれ、ひとりひとりに異なった目的や闘争がある。

ドゥルーズ&ガタリは、群衆による「分子状の体制」を中央集権的な全体主義国家の概念とは異なる「ファシズム」とする。「ファシズムは、繁殖し、点から点へ跳び移り、相互に作用し合う分子状の焦点と不可分の関係にある」(MP 261/ 中 108)。

彼らは、群衆による分子状の体制にいくつかのファシズム (例えば「家族のファシズム、学校や役所のファシズム」) があるとし、「いずれのファシズムもミクロのブラック・ホールによって規定される」(MP 261/ 中 108-109) とする。群衆を形成する人々のあいだに生まれる権力の中心点=ブラック・ホールを跳び移り、群衆を掌握しようとするものが、ドゥルーズ&ガタリのいう「ファシズム」である。人々の意向を群衆のものとして統一しようとするものが現れ、群衆の意向として束ね、中央集権的な単一の中心点を構築するのが、国家である。ゆえに「群衆」操作の比

類なき手段をもたらすマイクロ・ファシズムの存続が、国家にはどうしても必要なのだ」(MP 261/ 中 109)。

国家にとって重要なのは、群衆を制御するためのマイクロ・ファシズム＝マイクロ権力である (MP 274/ 中 129)。人々はマイクロ権力 (= フーコーのいう「規律」に則った学校や工場など) によって、「姿勢や態度、知覚や予感、そして記号系などが、すでに決定されている」(MP 262/ 中 110) ことで制御される。国家は、マイクロ権力を携え、人々の姿勢や態度などのあり方を決定するのである。

2-4. ミクロ政治と資本の流れ

国家は、マイクロ・ファシズムの効力で群衆を制御しようとする。このときに起こっているのは、組織を分断し、小さな範囲で制御するということである。

ゴルツの表現を借りるなら、世界資本主義にとっての労働人員は、分子状の個人、あるいは分子化した個人、つまり「群衆」である。大規模な、モル状に組織された治安管理と関連するのは小さな恐怖のマイクロ管理、不
断の分子的な非安全だ。(MP 263/ 中 111-112) ¹⁵

資本主義的な国家体制では、労働者という群衆を「分子状の個人、あるいは分子化した個人」として管理する。資本主義的体制のなかで労働者は、ドゥルーズ&ガタリが参照したヴィリリオの言葉を借りるならば、決して完成しないジグソーパズルのピースのような断片として管理されることになる¹⁶。資本主義は労働者の能力をさまざまに組みかえ利用し、資本に都合のいい個人をも生産するのである。

1970 年代に自由化されつつあった金融市場と企業との関係を考えて、資本に都合のいい個人の生産という労働者の管理＝群衆操作は、彼らのいう国家だけでなく、企業も担うようになって考えられる。

ミクロ政治は、切片性＝線分がもつ二項性を逃れる群衆の管理とともに、経済の「流れ」も管理しようとする。経済の流れは「複数の切片をもつ通貨の線」のふたつの面である「支払-通貨の線」と「融資-通貨の流れ」(MP 264-265/ 中 114) とされる。前者については、企業予算を例に挙げ、「賃金、純利益、経営陣の給与、資本金の利潤、準備金、投資など」という労働者などに支払われる通貨である。後者の融資の流れは、為替市場や証券取引を通じて生じるものであり、そこから経済潮流の「インフレーション、デフレーション、スタグフレーション」が起こる。融資の流れは、簡単には切片化されない「資本の流れ」(MP 264-265/ 中 115) ともされる。

ミクロ政治による資本の流れの管理は、生産力や物象の価値などを通じて行われることになる。それは生産と消費を行う資本家や労働者という群衆との関係から考えられる。つまり国家が経済に介入するようなマクロ政治の管理よりも、群衆による市場経済の形成を管理するミクロ政治に移行しつつあるということになるだろう。このように移行しつつある社会体制をドゥルーズ&ガタリは次のように分析する。

社会領域は、それぞれに異なる速度と進展に応じて「群衆」に働きかけるような、ありとあらゆる脱コード化と脱領土化の運動によって、絶えず突き動かされている。そこには矛盾ではなく逃走がある。このレベルではすべてが群衆の問題なのだ。(MP 268/ 中 120)

群衆の問題を強調するドゥルーズ&ガタリの姿勢は、ここまでの議論からもわかるように、群衆の管理のための「ミクロ政治」の台頭を強く意識していることが明らかである。彼らは、政治体制の分析を「群衆あるいは流れ」と「階級あるいは切片」(MP 270/ 中 122) というふたつの面の関係から考察する。流れと切片が接するとき、人々は「群衆であると同時に階級でもあるブルジョアジー」(MP 270/ 中 123) になり、資本家であれ労働者であれ、資本の流れのなかで活動する群衆として管理される。資本家と労働者という対立は溶解しようとしており、労働者は自らへの投資を行うとともに金融の流れを計算するようになり、経済の運動と個人の運動が結びついた新自由主義的な(フーコーであれば労働者の自分自身の企業化というような)主体が現れようとしていることを彼らは示している。

そのうえで彼らは「政治的な決定は、必ずミクロの限定と魅力と欲望の世界に浸されるため、この世界を予知し評価するにも、見方を変えなければならないのだ」(MP 270/ 中 123) という。新自由主義的な政治では、企業や個

人のあいだのミクロな競争を刺激することで生じる金融市場の流れを予知、評価しようとする。この形態は資本主義と親和性が高く、企業あるいは企業化した個人はますます支配体制の強化に加担する。

3. 『千のプラトール』における資本主義と隷属

ここでは議論の対象を第13プラトール「BC7000年——捕獲装置」に移し、ドゥルーズ&ガタリが支配体制を論じるために掲げる「捕獲装置」の概念を整理したあとに、支配体制のふたつの形態である「社会的服従」と「機械状隷属」を考察する。そして、以降では、これまであまり論じられてこなかった政治的な資本や群衆の管理がいかに資本主義的な隷属と接しているかを検討する。

3-1. 国家＝捕獲装置

ドゥルーズ&ガタリは、国家が「地理的、人種的、言語的、道徳的、経済的、技術的といったさまざまな点を共振させる」(MP 539/下171)とし、群衆のネットワークの形成＝共振を強調する。国家は、群衆の共振を禁止したり抑制したりすることで管理しようとするが、この管理はあくまでも国家が内包するもののみを対象とする。

国家による群衆の共振の管理は、国家に備わった「捕獲装置 *appareil de capture*」の機能によって行われる。ドゥルーズ&ガタリによると、古代専制国家は、ストック＝余剰を収集、所有し管理するために、地代などを捕獲する。群衆の蓄積を国家の蓄積へと転換するために収集を行うことが「捕獲装置」の役割である。

古代専制国家は、農業や畜産から生じる群衆の余剰を捕獲し、蓄積しようとする。近代国家での余剰は資本として現れるため、近代以降の国家は資本の蓄積を目指すのである¹⁷。ドゥルーズ&ガタリは、資本主義の公理系＝「市場のための生産」が形成されるにつれて、すべての国家、社会的形成は「同形になっていく傾向」にあり、「中心を持つ唯一の世界市場、すなわち資本主義市場」(MP 544/下177-178)になるという。

資本主義により同形化された「捕獲装置としての国家は所有の力能」(MP 544/下178)を持ち、戦争のための軍事事業や宇宙開発に至るまでのあらゆる事物を単一の市場を通じて捕獲するようになる。そして「捕獲は、分割可能な波や流れを逆転させる。まさに捕獲こそが独占的占有の対象なのである」(MP 557/下196)。資本主義国家は、群衆から生じる余剰＝資本を独占的に捕獲し、中央集権体制を成立させる。

新自由主義的な支配体制では、国家は中心的な役割から降り、軍事事業や宇宙開発に至るまで多くを企業が担うようになり、国家の発展は企業の生産の進化と結びつく。

ドゥルーズ&ガタリは資本主義の進展を、新たな生産様式(例えば、近代における機械の導入によるオートメーション化した紡績、現代ではコンピューターなどの機器を導入した労働)による生産の変化が、支配側に捕獲され、新たな生産様式をも統治の対象としていく過程とみなしている。

自由な労働者が主体的に労働を行い、各々が生産を資本に結びつける。ゆえに労働者には、自らの判断で私的に所有する労働能力を管理する必要が生じた¹⁸。対して資本家は、新たな生産様式に適応する能力を私的所有する労働者を、契約や協定を結ぶことによって使用するようになった。この資本家と労働者の関係が変化するにつれて、専制君主国家が強いてきた労働への従属という支配関係は、企業による自由になった労働と資本の流れの「接合」の組織化に変化する。企業は次々に生まれてくる生産様式とそれに適応した労働者を自らが利用できるように捕獲する。「資本のための生産」が全面化された世界市場＝世界資本主義の浸透により、政治経済的な支配体制にも変化が生じる。

3-2. 資本主義における支配関係

資本制社会へ

ドゥルーズ&ガタリは、マルクスを引きながら、資本制社会は、あらゆる活動＝生産に携わる活動全体を無差別に資本化し、資本制社会を生きる人間の主体性をその活動に取り込み、資本の増殖の循環のなかに置くとする (Cf. MP 565/下207)。

資本制社会はあらゆる活動を資本化するために、さまざまな生産部門の組み合わせ(アレンジメント)によって、

資本を増殖させる。国家は、専制君主国家のような王や領主への貢納を軸に置くのではなく、「資源、人口、富、設備などにしたがって複数の生産部門を集め組み合わせる」(MP 568/ 下 211) 形態となる。

こうした国家をドゥルーズ&ガタリは「労働と資本が自由に循環している、つまり資本の等質性と競争が原則的に外部からの障害なしに実現されている生産者集団」と規定し、資本の管理こそが「国家の新しい力、新しい権利」(MP 568/ 下 212) であるとしている。

ドゥルーズ&ガタリは、資本主義国家で生活する人間＝国民を「集団の主体化の操作そのものであり、近代国家とはこれに対応する服従のプロセスなのである」(MP 570/ 下 214-215) としている。続けて、資本制社会が国民を資本の増殖のための「生き生きとした情熱的形態」とし、資本増殖の循環のプロセスに投じるとしている。複数の生産部門に区別された生産者集団＝群衆は資本増殖の循環に従属する。

資本の運動と個人の運動が結びつく新自由主義的な群衆(＝企業)は、あらゆるものが資本の等質性に担保され、常に金融市場の動きを意識した競争に置かれるようになった。市場の流れを乗りこなすような従属が新自由主義的な力や権利として現れつつある。つまり、ドゥルーズ&ガタリは政治が金融市場という経済に従属する体制を築こうとしつつあることを意識したからこそ、資本主義の通貨や金融の流れに注目したと考えられる。

社会的服従と機械状隷属

ドゥルーズ&ガタリは、金融市場という経済の流れに従属する国家体制の「服従のプロセス」を「*社会的服従 l'assujettissement social*」と「*機械状隷属 l'asservissement machinique*」のふたつの概念に区別する。それぞれの定義を確認していこう。

社会的服従

〔社会的〕服従とは、上位の統一性が、動物であろうと機械であろうと、外部のものとなった対象にかかわる主体として人間を構成するときに現れる。このときもはや人間は機械の構成物ではなく、労働者や使用者となり、機械によって利用されるのではなく、機械に服従するのである。(MP 570/ 下 215 [] 内は筆者による。)

社会的服従は、人間に労働者や機械の使用者という役割(主体性)を外部的なもの(技術機械や他者とのコミュニケーション)との関係から与え、従属させることで支配する。ラッツァラートによると「社会的服従はわれわれに主観性を装備し、アイデンティティ、性別、身体、職業、国籍といったものを割り当てる」¹⁹。個人は主体性をもち、与えられた役割を全うするように仕向けられる。社会的服従は切片性の構築を促すのである。

(古代の) 機械状隷属

〔機械状〕隷属とは、人間みずからが、上位の統一性による管理と指揮のもとで、人間同士で、あるいは他のもの(動物や道具)とともに合成する機械の構成部品になっている場合に現れる。(MP 570/ 下 215 [] 内は筆者による。)

機械状隷属は、人間を機械の部品として、管理・指揮することで支配する。ドゥルーズ&ガタリは、個人の主体性を無視し機械の部品のように奴隷化することで、国民を隷属させるのが古代専制国家的な機械状隷属だとする。

近代国家の産業化のように、社会的服従による体制は人間を技術機械に服従させる。「この意味で、技術の進歩とともに近代国家は、機械状隷属に代えて、ますます強力な社会的服従をもたらしたように思われる」(MP 571/ 下 216)。ドゥルーズ&ガタリは、機械状隷属から社会的服従へという置き換えが古代から近代のあいだで進行したことを確認する。だが、彼らは隷属から服従へという歴史的進歩が資本主義の発展によって、再び「機械状隷属システムを再建し、発明している」(MP 572/ 下 217) と指摘し、機械状隷属に再度目を向ける。

資本制社会の〈機械状隷属〉

ドゥルーズ&ガタリは、資本制社会の技術機械の発展を、古代帝国の時代＝てこや滑車を使用した第一世代、近代＝動力機械（例えば紡績のための機械や蒸気機関など）を使用した第二世代、現代＝コンピューターなどを使用する第三世代と区切っている。そしてコンピューターなどを使用した第三世代が「全面的な隷属の体制を再構成している」（MP 572/ 下 217）という。資本制社会では、古代帝國的な隷属とは異なる別の機械状隷属が姿を現すのである。

資本制社会における社会的服従によって人々の主体性は、資本が「すべての人間を主体として構成する主体化の点として作用している」（MP 571/ 下 216）ことで、資本家と労働者とに区別される。これは切片性の二項対立による支配＝階級化に人々を服従させることである。

これに対するのが資本制社会の〈機械状隷属〉である。機械は、人間をその使用者、消費者、生産者ではなく、そこから発される情報をフィードバック・循環するための出入り口にする。入出力の一方を機械に、他方を人間にすることで「人間-機械というシステム」を構築するのが、新たな〈機械状隷属〉の体制である。この隷属は、人間と機械の関係を「可逆的かつ回帰的にしている」（MP 572/ 下 217）。ラッツァラートによると「機械状隷属は、個人化された主体、その主体の意識、その主体の表象を解体し、主体化の構成要素（知性、記憶、情動など）を非人間的構成要素（技術機械、物、記号など）と同じように機械に隷属する人間歯車に還元」²⁰する。

〈機械状隷属〉では、もはや個人の主体性は重視されず、交換可能なものとして扱われるようになる。つまり、人間を機械の部品、あるいはそれを動かすための情報として管理するのである。

4. 新自由主義の思想による支配と抵抗

4-1. 新自由主義の思想による支配が目指したもの

ドゥルーズ&ガタリは、〈機械状隷属〉が進むことで、人間が機械の部品や情報とみなされるようになりつつあると論じた。彼らは『アンチ・オイディプス』から一貫して、人間がなぜ救いであるかのように隷属しようとするのか、という人間が隷属状態に自ら喜んで進むことを問題にしている（Cf. AO 36-37/ 上 62）。

シャマユーは、ドゥルーズ&ガタリが人間はなぜ隷属へ向かうのかと問うていたのに対して、新自由主義の思想では逆方向にした狙いとしていかにして救いであるかのような隷属へ向かわせるかという問題が立てられていると指摘する²¹。新自由主義の思想による支配は「われわれの望むような行動をとらせるにはひとをどう誘導したらよいか？ かれらの強い欲望を抑圧するというより、むしろどうでもいいような選択を方向づけし直すことで誘導すればよいのだ」²²と考える。ドゥルーズ&ガタリが隷属へ向かってしまう人間の行為や思考を問うたのに対して、新自由主義の思想は人間を隷属へ向かわせるための技法を生み出そうとしているのである。

ドゥルーズ&ガタリは、新自由主義的な体制が国家を縮小する「アナルコ・キャピタリズム」へ向かうと分析する。アナルコ・キャピタリズムと呼ばれる資本主義が構想されたのは、第一次世界大戦以降の資本主義が「労働者階級、雇用、組合組織、社会制度、国家の役割、国外市場と国内市場に関して、公理を多様化し新しく発明することを余儀なくされた」（MP 577/ 下 224）ことに関係する。資本主義の公理、すなわち人間をいかにして資本の増殖へ向かわせるかという方法に新たな発明が必要となったのである。このとき「問題は、自由か制限かでも、中央集権か地方分権かでもなく、流れを制御する仕方である」（MP 577/ 下 225）。

アナルコ・キャピタリズムを採用する国家は、公理を除去＝引き算する方法を採り、「支配的な流れを調整」し「きわめて少数の公理だけに制限」するような「全体主義」国家の極（MP 577/ 下 225）に傾く。こうした全体主義国家は、「国外部門を独占的に促進し、国外資本を誘致し、原材料や食料の輸出に向けた産業を発展させ、国内市場の崩壊をもたらす」。極端な場合、資本主義の公理は、資本増殖の量的な「数」にのみ目を向け、貿易の利益や蓄積の増加など、結果としての数の増減に注意を払うようになる。〈機械状隷属〉による人間の機械部品化や情報化のように国家にとって人口は情報の数量でしかなくなっていくのである。

彼らの考える全体主義国家は、経済計画などを行わず、経済を市場原理に任せる自由放任主義を採用する。支配側による自由放任の採用＝公理の減算は同時に、国家自体の縮小も意味する。ゆえにドゥルーズ&ガタリは「全体

主義国家とは、国家としての最大値ではなく、(……) アナルコ-キャピタリズムの最小国家(チリを参照)なのである」(MP 578/ 下 225)と述べている。この時期にチリでは、新自由主義的な政策に基づく支配体制が敷かれた。シャマユーは、チリに起こったことが「ファシスト資本主義」という「ある粗暴な勢力が解放し、押しつけ、維持している資本主義」²³ だという。チリでは支配に従わない集団は行方不明と称して排除された。権力側に都合がいいものだけを数にいれ、群衆として承認する。まさしくドゥルーズ&ガタリが指摘した、ミクロ政治を通じて群衆を管理するファシズムという国家形態が現実に出現したが、体制は維持されることなく崩れ去った。

現代では、国家が新自由主義的な体制として立ち上がるわけではなく、別の形でその姿を現している。ドゥルーズ&ガタリがファシズムと呼ぶ群衆操作と捕獲装置が結びつくとき、新自由主義的な隷属の技法が別の形で生み出される。例えば、個人の些細な料理のアイデアなどの知識や購入履歴を企業が吸い上げて利用するように、インターネット上では群衆の能力を資本化へ向かわせ、捕獲することが常態化している。これは集団あるいは個人の知識やコミュニケーション能力を資本として利用する認知資本主義として議論されている。一般的知性とされる集団的、社会的な知性が新たな技術の進展につながるという議論である。まさしく〈機械状隷属〉により人間を情報とみなす体制が現代には現れている。

このとき人間を管理するのは国家ではなく、企業が中心となっている。1970 年代の新自由主義的な潮流のなかで自由になった企業の競争は、労働者の生の全体を資本化し、捕獲するようになった。企業は個人の能力の競争などを捕獲し整えるための場(=プラットフォーム)を提供し管理するというミクロ権力を発揮している。つまり、ドゥルーズ&ガタリは、金融=経済が優位になりつつあった新自由主義的な潮流による新たな支配体制の到来を分析したとも考えられる。

4-2. マイノリティへの生成変化

ドゥルーズ&ガタリは「われわれの時代は、マイノリティの時代になりつつある」(MP 586/ 下 237) という。彼らは群衆の管理を目指すミクロ政治への対抗のために「マイノリティ」という概念を練り上げる²⁴。

マイノリティは「増殖しつつ内部から作用し、マジョリティという概念自体、つまり公理としてのマジョリティを破壊する危険」(MP 586/ 下 238) をもつ。例えば、白人に対する「非白人」は、「数えられる集合を構成しない」とされ、二項対立から逃れ、いくつもの集団を形成している。ゆえにドゥルーズ&ガタリは「ひとつのマイノリティは、多数でもあれば無数でもありうる」(MP 586-587/ 下 238) のだという。

ドゥルーズ&ガタリによる「マイノリティ」概念は、数が少ないということで定義されるわけではなく、マジョリティの公理からの隔たりによって決定される(Cf. MP 587/ 下 238)。こうしたマイノリティは、「その要素の数にかかわらず、数えられない集合として定義される」(MP 587/ 下 238) ことになる。

群衆は、その切片性の一方を代表とするマジョリティを形成しようとするため、数えられる集合となる。対して、マイノリティ=数えられないものは、「連結つまり「と」であり、要素と要素のあいだ、集合と集合とのあいだに発生し、両者のいずれにも属することなく、それらを逃れ、逃走線を形成するもの」(MP 587/ 下 238) となる。

マイノリティは「逃走または流れからなる「大衆」であり、多様体」であり「資本主義経済や国家的形態を経ない組織を促進している」(MP 587/ 下 239) とされる。資本主義経済や国家的形態は、マイノリティを数えられる集合=群衆として管理しようとする。この管理への対抗が、数えられない集合としてのマイノリティになることである。

対抗する「マイノリティの特性は、たとえたった一人のメンバーからなるマイノリティであっても、数えられないものの力能を際立たせること」(MP 588/ 下 240) にある。

どんなに控えめな要求であっても、人々が自分自身の問題を提起し、それらの問題がより一般的な解決策を得るための個別的な条件を自ら決定することを要求するとき(革新的な形態としての個別的なものを保つこと)、それはつねに公理系が許容できない一点を提示している。(MP 588/ 下 240)

マイノリティになること、それは資本制社会での群衆の問題=資本増殖の一点に集約されないために「個別的なものを保つこと」による対抗を提示することである。そして、ドゥルーズ&ガタリは〈機械状隷属〉によって部品や

情報という数えられるものに成り下がろうとしている人間のなかに「同時に存在するもう一つの闘いの指標であることを示す兆し」(MP 588/ 下 240)の存在＝数えられないものとしての個別性へと目を向けることを目指すのである。

新自由主義的な体制に対して、ドゥルーズ&ガタリが提示したマイノリティになることでの対抗は、ガタリが後年に関心を寄せたエコロジー的实践やネグリ&ハートのマルチチュード概念などを通じて現代でも議論が行われている。これらはマイノリティたちの闘争がどのような特異性の連帯を生むのかを、ドゥルーズ&ガタリの理論を飛び越えて思考している。しかし、これは本論の範疇を超えるため今後の課題とする。

おわりに

本論は、1970年代の新自由主義の台頭とドゥルーズ&ガタリを結びつけ、新自由主義的な支配体制を批判するための理論を読み取ろうとした。国家による企業の非国営化や市場の規制緩和などを通じた新自由主義的な体制の全面化（はじめに、第1章）は、ドゥルーズ&ガタリによると、労働の分業化などによって切片性の区切りを強固にするミクロ政治へと支配体制を移行させる。本論は、ミクロ政治が、どのように労働者などの群衆や資本の流れを管理するのかを論じた（第2章）。そして、国家の資本主義的な支配体制がどのように新たな隷属の形態を生み出すかを〈機械状隷属〉という概念から検討した（第3章）。最後に、資本増殖に依存した支配を強化していく新自由主義的体制への隷属に陥らないための対抗策として、「マイノリティ」による逃走線という個別性を創造する運動を強調し、人間が〈機械状隷属〉によって、機械の部品や情報という数えられるものに成り下がらないための闘争の指標を提示した（第4章）。以上から本論は、資本主義の全面化と新自由主義的な体制への批判として『千のプラトー』の政治論と資本主義論を論じた。

凡例

ドゥルーズおよびドゥルーズ&ガタリの著作からの引用は以下の略号を用いて原典、邦訳の順に頁数を示す。なお便宜上『無人島』と『狂人の二つの体制』の邦訳は、本論で使用される文献が掲載されているもののみを示す。引用に際し邦訳を参照したが筆者の責任において改訳した箇所もある。

Gilles Deleuze et Félix Guattari,

AO : *L'Anti-Œdipe. Capitalisme et schizophrénie*, Minuit, 1972. (『アンチ・オイディプス』上下巻、宇野邦一訳、河出文庫、2006年。)

MP : *Mille plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980. (『千のプラトー』上中下巻、宇野邦一ほか訳、河出文庫、2010年。)

Gilles Deleuze,

ID : *L'Île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, éd. préparée par David Lapoujade, Minuit, 2002. (『無人島 1969-1974』小泉義之監修、稲村真実ほか訳、河出書房新社、2003年。)

DRF : *Deux régimes de fous. Textes et entretiens 1975-1995*, éd. préparée par David Lapoujade, Minuit, 2003. (『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一監修、宇野邦一ほか訳、河出書房新社、2004年。)

註

1 佐藤嘉幸・廣瀬純『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』講談社選書メチエ、2017年、177-178頁。

2 デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義』渡辺治監訳、作品社、2007年、9-11頁。

3 Cf. 小田中直樹『フランス現代史』岩波新書、2018年、29頁。以降、フランス国内の政治経済的な歴史については同書を参考とした。

4 同前、105-106頁。

5 Cf. 権上康男『新自由主義はどのようにして経済社会を支配するにいたったか（1958-99年）—フランスの事例—』『横浜商科大学紀要』第11巻、2016年、146-147頁。

- 6 小田中、前掲書、112 頁。こうした状況を市田良彦は「70 年代のフランスはすでにド・ゴール的「国家主導主義 dirigisme」からの脱却と市場重視の姿勢をはっきり打ち出して」いたとまとめている（『革命論』平凡社新書、2012 年、84 頁）。
- 7 ミシェル・フーコー『生政治の誕生』慎改康之訳、筑摩書房、296 頁。
- 8 Raymond Barre, « Dialogue sur le Libéralisme », *Une politique pour l'avenir*, Plon, 1981, p. 106.
- 9 スラヴォイ・ジジエック『身体なき器官』長原豊訳、河出書房新社、2004 年、345 頁。
- 10 Nigel Thrift は、本来批判的であった彼らの哲学や概念が現代資本主義の理論に適応されており、資本主義みずからの描写に活用されていると指摘する（*Knowing Capitalism*, Sage Publications, 2008, pp. 3-4）。また Dany-Robert Dufour は、資本主義を批判的に論じた彼らの議論が新自由主義的な潮流が訪れたときに、実際のところでは「彼のプログラムが資本主義を超えることを可能にするどころか、その進行を予測していただけた」とし、「今日では、新しい資本主義がドゥルーズの教訓を理解したかのように見える」と指摘する（*L'Art de réduire les têtes: Sur la nouvelle servitude de l'homme libéré à l'ère du capitalisme total*, Éditions Denoël, 2003, pp. 23-24）。
- 11 同様の立場を採るドゥルーズ&ガタリの思想と新自由主義の思想を関連付ける数少ないものに、Simon Schleusener, “Deleuze and Neoliberalism” (in *Coils of the Serpent*, Simon Schleusener and Florian Cord (eds.), Issue 6, Journal for the Study of Contemporary Power, 2020, pp. 39-54) や、ギヨーム・シベルタン＝ブラン『ドゥルーズ＝ガタリにおける政治と国家』（上尾真道・堀千晶訳、書肆心水、[2013] 2018 年）がある。Schleusener は、ドゥルーズ&ガタリが『アンチ・オイディプス』から『千のプラトー』の期間に、1970 年代後半の新自由主義の台頭を踏まえて議論を変化させたことを指摘する（p. 40）。また、シベルタン＝ブランは、新自由主義政策が国家暴力につながることを彼らが指摘したとする（218 頁）。本論はこれらの指摘に同意する。しかし、いずれも新自由主義的な方向への社会の変化にそれほど注目しない。そこで本論は、国家から企業へという新自由主義的な変化と『千のプラトー』における社会体制の支配の問題に注目し、政治論と資本主義論を結びつけたあとで新自由主義的な思想への対抗を論じる。
- 12 フェリックス・ガタリ&アントニオ・ネグリ『自由の新たな空間』杉村昌昭訳、世界書院、2007 年、45-48 頁。
- 13 ジジエック、前掲書、49 頁。初期のドゥルーズ個人の仕事には、制度論やマゾッホ論での法への関心などがあり、必ずしも非政治的とはいえない。
- 14 他にも 1977 年の「ヌーボー・フィロゾフ及びより一般的な問題について」がある。いずれのテキストも雑誌に掲載されたもので、『狂人の二つの体制』に収録されている。
- 15 具体的な参照源を明記せずにアンドレ・ゴルツの名が挙げられるが、おそらく彼らが参照したのはゴルツの『労働者戦略と新資本主義』（小林正明・堀口牧子訳、合同出版、[1964] 1970 年）だろう。ゴルツは「独占資本」が個人を「生産のための生産、すなわち蓄積のための蓄積」にふさわしい消費状態に強制し受動的にするといい、「独占資本のための道具である目標や欲望、熱望といったものをおしつけるのに都合の良い大衆的個人を要求する」としている（78-84 頁）。こうしたゴルツの資本主義が浸透した社会での人間のあり方は、後にドゥルーズが管理社会論で論じるものに近い。
- 16 Paul Virilio, *Essai sur l'insécurité du territoire*, Éditions Stock, 1976, pp. 234-235.
- 17 マルクスによる「本源的蓄積」の議論が参照されている。MP 558/ 下 198.
- 18 労働者は、自らの労働力を商品として売る自由、自らの労働力を売るしかなく何者にも拘束されていない自由という二重の意味で自由であるとされる。Cf. カール・マルクス『資本論』岡崎次郎訳、国民文庫（大月書店）、第 1 巻、1972 年、296-297 頁。
- 19 マウリツィオ・ラッツァラート『記号と機械』杉村昌昭・松田正貴訳、共和国、2016 年、23 頁。
- 20 同前、23 頁。
- 21 グレゴワール・シャマユー『統治不能社会』信友建志訳、明石書店、2022 年、344 頁。
- 22 同前、345 頁。
- 23 同前、288-291 頁。「ファシスト資本主義」は、シャマユーがポール・サミュエルソンから引用した言葉である。
- 24 『カフカ』から始まるマイノリティ論の詳細については稿を改める。

The Logic of Enslavement in Deleuze & Guattari's Critique of Capitalism and the Rise of Neoliberalism

HAMANAKA Kenta

Abstract:

This paper examines the theme of enslavement in Deleuze & Guattari's *A Thousand Plateaus* (1980) in the context of the rise of neoliberalism in the 1970s. This paper aims to identify Deleuze & Guattari's critique of capitalist domination and to show that their theory is a tool of opposition to the neoliberal control systems. To discuss this aim, the paper first summarizes Deleuze's and Guattari's political views in the 1970s and examines their attitudes toward domination during this period. Second, this research discusses the concept of fascism and mass control, drawing extensively on the 9th plateau of *A Thousand Plateaus*. Third, the intricate relationship between capitalism and domination is meticulously explored through the lens of machinic enslavement, leveraging insights from the 13th plateau. Finally, the paper explores how Deleuze & Guattari's theory relates to neoliberal systems of control. The paper concludes by arguing that Deleuze & Guattari's philosophy offers indispensable insights for understanding and critiquing contemporary neoliberal control systems.

Keywords: Deleuze & Guattari, Neoliberalism, Capitalism, Machinic enslavement, Minority

ドゥルーズ&ガタリの資本主義論における隷属の論理と新自由主義の台頭 ——『千のプラトー』を中心に——

濱 中 健 太

要旨:

本論は、1970年代の新自由主義の台頭に伴う政治経済体制の変化を背景に、ドゥルーズ&ガタリ『千のプラトー』(1980)における隷属の問題について考察する。本論の目的は、彼らがどのように資本主義の支配構造を批判したかを明らかにし、その理論が新自由主義的な支配体制への対抗の道具であると提示することである。そのために本論は、1) ドゥルーズとガタリそれぞれの1970年代における政治に対する発言を整理し、この時期の彼らの支配体制への態度を確認する。2) 『千のプラトー』第9プラトーから、群衆とその管理のためのファシズムを論じる。3) 第13プラトーでの資本主義と支配体制の関係を〈機械状隷属〉概念から考察する。4) 彼らの理論と新自由主義的な支配体制の関係を論じる。以上から本論は、彼らの哲学が現代の新自由主義的な支配構造を理解し、批判するための視点を提供し、その意義は依然として大きいことを確認する。